

守山まるごと活性化 議事要旨

作成者：植村

会議名：平成30年度 Aプロジェクト語り部部会 管外研修

日時：平成30年6月20日（水）

場所：高島方面（針江生水の郷、琵琶湖周航の歌資料館等）

出席：語り部部会メンバー、会館：館長、主事

会議要旨

内容

<針江生水の郷>

針江地区は湧き水を利用したかばたを現在も生活の中で利用している地区で、ボランティアガイドの案内の下一般家庭にある外かばた・内かばたを見学した。

昔からあるかばたは円形で竹筒を利用しているもの、比較的最近作られたかばたは四角形をしているとのこと。かばたの水は、飲めるほどにきれいで、生活用水（料理、洗車等）に使われたり、野菜等を冷やしたり様々なことに活用され、水温は年間通して14度前後が保たれている。夏は冷たく、冬は暖かい。また、多くの家庭がかばたから水をくみ上げており、水道水はあまり使っていないとのこと。

また、かばたの中には鯉を飼っており水の「掃除屋さん」の役割をする。

また、景観も昔ながらのものを維持するよう補助金等もでており、家の壁板には焼杉が使われているところも多くある。昔工場等を営んでいたところは横向きに、民家は縦向きに板がはられてる。

案内してもらったガイドさんは、10年ほど続けており最近では全世界からお客さんが来るとのこと。



<琵琶湖周航の歌資料館>

琵琶湖周航の歌は、大正6年6月28日に小口太郎により作詞された。現在の京大である旧第3高等学校のボート部であった小口が琵琶湖を周航した際に作り、チームメイトが当時流行していた「ひつじぐさ」のメロディに乗せようと提案して生まれたもの。

一方「ひつじぐさ」は吉田千秋により生み出された。持病で結核を患っていた吉田は大学進学後、独学でキリスト教を学びその中で讃美歌にも触れる。ひつじぐさはその讃美歌を編曲したもののため、「作曲者」ではなく、「原曲者」として表記される。



<研修後の反省会・感想>

- ・ガイドさんが自分の言葉（方言等）で案内をしてくれたのがよかった。
- ・かばたで歩きながら、資料館で座って2種類の案内を聞いたのがよかった。
- ・ガイド使用と思うと5人くらいの人数が限度。それ以上は難しい。
- ・かばたのガイドさんが、わからないことはお客さんに教えてもらうといていた。それも勉強
- ⇒かばたは生活の話で家庭によって詳細がかわるので時には「わからない」ですむかもしれないが、諏訪屋敷のガイドとなるとそれではすまないのでは。
- ・ガイドさんにユーモアがあった。長年の経験のなかで身についたものだろうから、諏訪屋敷ガイドも最初はマニュアルをみながらでも仕方ない。
- ・難しいことはパンフレットに逃げる（諏訪屋敷ガイドについて）
- ・かばたのガイドも一応マニュアルはあるらしいが、講習会等はなく、個人で勉強されている。
- ・琵琶湖周航の歌資料館の館長さんも、何も見ず穏やかに話されていて上手だった。
- ・諏訪屋敷の周辺を散策する際は、ルールをつくっておかないとトラブルのもと。
- ・昔話をこどもに伝える活動は喜んですが、諏訪屋敷の専門知識が必要なガイドをボランティアでいうのはなかなか難しいのでは・正直しんどい部分もある。